

FMOCA コレクション展

体 -カラダ-

昨年度、フォーエバー現代美術館では、自然の風景や日常の事物をアーティストの心、身体、精神で捉えた世界、またその世界を表現する手段である媒体をテーマとして作品を紹介しました。私達は多くの媒体を表現手段として使用し、実際には存在しない仮想の世界で表現活動を行うことさえ可能となっています。しかし、技術の飛躍的な進歩に左右されることなく、何かを表現する側、また受取る側にとっても不可欠な媒体として、「体」はその重要な役割を終えることはありません。本展では、この「体 -カラダ-」をテーマに FMOCA コレクション展を開催します。

美術という概念が生まれる以前から、人間は生命の構造やその美を研究し、追求してきました。長い時の流れの中で生命体は様々な形で変化を続け、私たち個人という単体もまた、様々な要因により、時に形体を変化させます。また、体には外部環境から得た情報を印象や知覚として受け取る役割があります。私達の生活は、通常、実用的な価値判断によって支配されていますが、意識的に認識や思考を歪曲させることで、世界に対して新たな視点を得ることができます。体を通して得た印象を関連づけ、結合させることでそれぞれを比較し、類似性、時間や場所の連続性、因果関係というお互いの関係性を見出すことができます。これはアートがなしえる役割の一つであり、美術的な印象は、世界に存在する物事の中に共通点を探すだけでなく、各事物の独自性を明かすことができます。こうした美術の機能において、体というモチーフは、特別な意味をもつ個体として、また、集団的なシンボルとして表現の源となってきました。

行動の主体である体は、時に言葉より強い印象、多くのメッセージを放ちます。その中でも、動植物の姿形は時に特別な意味付けをされ、時にシンボリックな存在として数多く作品化されてきました。ヨーゼフ・ボイス(Joseph Beuys)は、幼少から動植物や自然科学に魅せられ、動物を世俗と精神世界との掛橋として考えるなど、その影響は作品にも強く表れています。多くの文化で、シャーマン(呪い師)は天界への旅における守護霊として動物を捉えられてきましたが、ボイスもまた動物を言わば表現活動という旅における導き手として考えていました。中でも特に多く用いたのが野兎と雄鹿です。彼は常に野兎の毛を魔除けとして身につけ、自分の尖った耳を野兎との関

係性を示すものと考えました。ボイスにとって、動物と近い関係を保つことは、彼らから直観という最高の知能を学ぶ上で極めて重要なことだったのでしょう。アートと自然科学、直観と論理のつながりは、ボイスの制作活動にとって重要なコンセプトでした。それは、ルネッサンス期の巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチの視点へと向けられ、展示作品「レオナルドの『マドリッド手稿』の為の素描」に見ることができます。これは、ダビンチのスケッチブックをもとに現代の写本として描いたイメージとして、20世紀末、科学と自然界、そして美術の関係を目に見える形で現す試みでもありました。

一つとして同一のものが存在しない体は、アーティストによって思考され作品となることで、時に作品自体に生命を与えます。本展では、美術における永遠の主題でもある「体」をテーマに、科学と生命、そして美術の関係を考える契機を与える作品を紹介します。作品の中で息づく生命体から新たな認識、思考を感じていただければ幸いです。

2009年4月11日

フォーエバー現代美術館

チーフキュレーター 加藤 淳